W・ディルタイにおける「体験」の定義

鵜殿　博喜

一　はじめに

「体験」ということばは日常のなかでさまざまな使い方がなされている。「夢のリゾート地で忘れられない体験を」とか、「私の初体験は・・・」とか、「体をはって体験しろ」とか、「戦争体験を語る」等々、挙げればきりがないほどいろいろな場面で使われることばである。

ところで、これらの体験を経験ということばに置き換えることは可能だろうか。「忘れられない経験」、「私の初経験」、「体をはった経験」、「戦争経験」とすると、「忘れられない経験」はありえそうだが、その他は日本語としてはあまり使われない言い方であろう。日本語の「体験」は、広辞苑の定義によれば、「自身が身をもって経験すること。またその経験」というあっさりした説明で終わっていて、同じ広辞苑の「経験」の説明の長さに比べるとあまりにも短い。「経験」は哲学用語としても「体験」より深い意味が与えられている。

ドイツ語の場合、独和辞典のなかでは、Erlebnis には体験と経験、Erfahrung には経験という訳語が与えられている。Das Erlebnis der ersten Liebe という例文に「初恋の体験」という訳文がつけられているが、しかし「恋愛体験が豊富」と「恋愛経験が豊富」ではどちらが一般的であろうか。日本語の「体験」と「経験」の厳密な辞書的定義は別として、一般的な用法としてはどちらの使用もありうる場合も多いであろう。

日本語の体験と経験を思想的に峻別し、経験ということばに深みを与えたのは哲学者の森有正である。森有正は言う、「経験と体験とは共に一人称の自己、すなわち『わたくし』と内面的につながっているが、『経験』では《わたくし》がその中から生れて来るのに対し、『体験』はいつも私が存在しているのであり、私は『体験』に先行し、またそれを吸収する。こういう本質的相違が存するのである。[1]」「明らかにされて来る『現実』あるいは『経験』は、より真実な現実把握への批判的傾動をもっていなければならない。それが『経験』の真の意味であり、『経験』を『体験』から截然と区別するものである。[2]」「『経験』というのは、『経験』にとって異質の領域に向って開けている、そういう『経験』のことを言うのであり、『体験』とは、その反対に、そういう領域に向って

閉ざされ、自己の『経験』の明証性の中に静止する『経験』のことである。[3]」私という自己を先存在的固定的に考えれば、いかなる経験も私から生れてくるものとなり、それは閉じられた経験、つまり体験となる。それに対して、真の経験は私を生み出す、ということは未来に開かれているものということになる。森有正の「経験」論はかんたんに略述することを許さない人間の実存に関わる問題を含んでおり、森の思想の到達点を示すものと言ってよいと思うが、ここでは日本語の経験と体験ということばのもつ相違を探るのが目的なので、森有正の「経験」についてはこれ以上論及しない。

日本語の「体験」と「経験」ということばのもつ意味は、以上述べたように、日常の用法から思想的なレベルまでさまざまで、意識的無意識的に異なった使い方がなされている。

このように日本語では体験と経験は使い分けられているが、英語ではともにexperienceである。つまり体験と経験の区別がない。ディルタイの英語版選集の共同編訳者であるルードルフ・A・マックリールは、「体験（Erlebnis）は『経験』（Erfahrung）という語によって示される、より通常の経験（experience）と区別するために、英語ではしばしば『生きられた経験』（lived experience）と訳される[4]」と述べている。英語では体験と経験を思想的に区別する場合はlivedという形容詞をつけなければならないということである。ちなみに、英語版選集の第5巻はPoetry and Experienceとなっており、『体験と創作』（Das Erlebnis und die Dichtung）に収められている『ゲーテと詩的ファンタジー』（Goethe und die dichterische Phantasie）の中の「体験と創作」（Erlebnis und Dichtung）という小見出しの英訳はPoetry and lived experience（詩と体験）となっている。[5]ドイツ語原文では本のタイトルと文中の小見出しは定冠詞を除けば同じ語になっているが、英訳では小見出しのほうにはlivedがつけられ、たんなるexperienceと区別されている。細かいことの詮索のように思われるかもしれないが、ディルタイにとって「体験」（das Erlebnis）はひじょうに重要な概念なので、この語がどのような外国語の単語に置き換えられるかは等閑に付すことのできる問題ではない。

同じことは、ディルタイ文芸論の中核的概念であるPhantasieとEinbildungskraftの区別についても言える。英訳ではどちらもimaginationにしている。筆者はこの両語の使い方を分析して意味内容の差異を明らかにしようと試みたことがあるが、[6]ディルタイ自身二つの語を用いて「想像力」について論究しているのであるから、当然なんらかの意味の区別がなされているにちがいない。しかし英訳ではなぜかどちらの語もimagination一語で済ませている。たしかにドイツ語のPhantasieとEinbildungskraftはどちらも英語ではimaginationに相当する。しかし「体験」と「経験」を区別するために、「体験」にはexperienceの前にlivedをつける工夫をしているのである。ならばPhantasieとEinbildungskraftを区別するためになにか工夫はできなかったのであろうか。

それとも現代のディルタイ研究を代表する一人である英訳者はPhantasie とEinbildungskraft はまったく同義であると解釈しているのだろうか。

現代ドイツにおけるディルタイ研究の第一人者といってもよいフリチョフ・ローディ（Frithjof Rodi）は、その著書のなかで「体験」について次のように述べている。「体験概念にとって重要なのは、この〈魔法の言葉〉である体験が確固たる術語になりはじめるのはどこにおいてなのか、それを決定することである。この概念に特定の術語としての不動の地位を与えたのはディルタイであったということ、また『体験と創作』という書物のタイトルによってこの語の使い方が普及し、と同時にこの概念の空洞化もはじまったということは、一般に知られているところであり、ここでさらに詳しく述べる必要はない。それに対して、術語として固まる最初の時期はこれまではっきりと明らかにはされてこなかった。[7]」しかし小論では、体験という語がどこではじめて使われるようになったかという問題には触れず、むしろローディが言うように、この語をポピュラーにした『体験と創作』のなかの、ディルタイ自身が中心的論文と位置づけたゲーテ論によって、体験という語に託されたディルタイの思想、および体験と経験の意味合いの違いに焦点を当ててみたい。

またここで対象とするのは、一般的な体験というよりも、文学が生まれるさいの体験の役割、あるいは人間の精神活動のなかでの体験の意味である。

二　das Erleben と das Erlebnis

体験をあらわすドイツ語には das Erleben と das Erlebnis の二種類がある。ディルタイはこの二つの語を区別せず無造作に使っているようにみえる。しかしまったく同じ意味ならばどちらか一語に統一すればよいわけで、両方の語を用いるということはそこになんらかの意味の差異を意識していることになろう。ボルノー（BOLnow）の解説によれば、「ディルタイはErleben とErlebnis という二つの語を、同時に（交互に）、両語のあいだにはっきりした境界線を引くことができないやり方で用いている。にもかかわらず、Erleben という語のほうは解釈の仕方に、つまり〈現実（Realität）が私にとって存在するときのそのあり方〉のほうにより向っており、Erlebnis は現実自身の側面（〈体験というRealität 〉として）のほうにより向っている。しかしこの両面がここで交叉しているということこそ、まさに独自な点である。[8]」実際、ディルタイの両語の使い方の区別はボルノーの説を裏書きしているようだ。ディルタイが『詩学』の改作のためにしたためていた断章のなかにDas Erlebnis という項目があり、そこではこう記されている、「体験（Erleben）は、現実（Realität）が私のために存在するさいの、異なった特徴をもつあり方である。つまり体験（Das Erlebnis）は、知覚されたものあるいは表象されたものとして、私に向ってあらわれるのではな

い。体験はわれわれに与えられているのではなく、われわれが体験という現実を知覚することによって、また私がなんらかの意味で私のものであるとしてその現実をじかに所有することによって、体験という現実は私のために存在するのである。[9]」

三　体験の用法例

小論では、das Erleben と das Erlebnis の厳密な区別はさておいて、die Erfahrung（経験）との違いを意識しながら体験の本質に迫ってみたい。

『体験と創作』（第三版一九一〇年）のなかのゲーテ論文（「ゲーテと詩的ファンタジー」）では、体験という言葉が五十四回使われている。これに erleben という動詞と das Erlebte（体験されたもの）という過去分詞の名詞化した形を加えるとさらに増える。ところが初版（一九〇六年）ではただの二十回にすぎない。『体験と創作』は初版から第三版まで次々と短期間で改訂が施され、とくに初版から第二版へは大改訂がおこなわれた。初版は若いころに書いていた論文を集めて一冊の本にするようにという弟子たちの勧めによってできたものなので、改訂版で決定版となった第三版にこそ晩年のディルタイの思いは詰まっているはずである。この第三版を主テキストとして、まず体験がどのような使われ方をしているか、いくつか実例を挙げることから始めてみたい。

（一）「詩人がくぐり抜ける無数の生の状況のひとつひとつは、心理学的な意味で体験と呼ぶことができる。[10]」

（二）「ギリシアの悲劇詩人たちが内面の宗教的世界を劇形式で視覚化したことによって、ひじょうに深い体験が表出されたが、その体験の表出はしかし同時に歴史的事実を描き出すことでもあった。[11]」

（三）「ゲーテは個人的な体験や、自己の人間形成的な修行を表現する。そしてこの体験と体験の表出との関係のなかに、観察しただけではわからない心的生の秘密と心的生のプロセス全体と心的生の深さのすべてが現れ出る。この場合はつねに、このような個人的体験と表現の関係は、外から受動的に与えられるものと能動的理解の関係と複雑に絡み合っている。というのは、個人的体験は、心的状態と周囲の世界の客観的状況が関連し合いながらつくられるからである。[12]」

（四）「ゲーテは新たな状況から生じる内面の状態を観察する。そして体験したことを、彼の心をすっかり虜にした世故にたけた女性とともに味わい、体験の意義をよく考えることによってはじめて、彼の体験は彼にとって究極の最高の価値となる。[13]」

（五）「生と生の解釈が詩の根底にあり、詩人の個性が詩の中核をなしている。このことは体験と創作の関係に決定的役割をはたしており、体験と創作の関係はゲー

テの詩的創造を左右するものである。[14]」

（六）「詩人は、体験と体験したことの表現とのあいだにある構造的な連関をふまえて創作する。ここでは体験したことは余すところなく表現される。自己の省察によって体験の深さを言葉にできなくなるわけではない。[15]」

（七）「ゲーテの普遍性は、あらゆる人間的なものを追体験して理解することによって生じた。すべての理解が体験にもとづいているように、理解はまた彼のうちではふたたび自己の現実存在の拡大を促していった。[16]」

（八）「ゲーテは未知の世界を自己の生に関係づけることによって理解し、理解されたものは彼自身の発展の契機となった。彼の存在の本質はとても豊かで、自分の現実存在に限りない広がりを与えたい、自分の見方に客観性を与えたいという欲求がとても強かったので、彼は時代の宗教、学術、哲学の運動を体験のなかに取り入れた。[17]」

（九）「ゲーテの個人的な文芸の唯一の偉大さは、彼の文芸においてもっとも個人的なものが、一般的な運動から彼の本質の構成要素へと転化したものすべてときわめて密接に結び合わせられているという点にある。最大級の精神的現象が彼の体験になったからこそ、それらの現象は彼のきわめて固有の運命と結びつくことができたし、彼を動かし震撼させることができた。・・・個人的な体験をこのように広い意味で解すると、疑いなくゲーテの文芸の基本は体験のなかにあったのだ。[18]」

（十）「自然研究はゲーテの理解の客観性を強める。いまでもなお彼の文学が個々の状況から影響を受けていようとも、彼の文学はやはり体験の総和にもとづいており、体験から生じた、世界に対する気分にもとづいている。[19]」

（一）では体験の深い意味は隠されているが、「心理学的な意味で」とある点が人間の内面と関わりをもたせていることを示唆している。

（二）では「内面の宗教的世界」「深い体験」という言い方で、体験が生死に関わる存在の深みとのつながりが表現されている。さらにのちに言及することになるが、「体験の表出は歴史的事実を描き出すこと」という言い方で、外部の事象と内面との連関が表現される。

（三）は前半は一種のゲーテ論になっており、ゲーテの創作の秘密が体験という言葉をとおして説明されている。後半部分はディルタイの考える体験の重要な要素が簡潔に述べられている。つまり、受動と能動的理解の関係、心的状態と客観的状況の関係である。体験はたんに与えられるものではなく、体験と理解は有機的に結びついているのである。

（四）では「意義」、「考える」がキーワードである。ここでの「意味」はBedeutungという語が使われているが、

同種の単語のBedeutsamは体験によって個々の事柄にもたらされる重要概念で、「Bedeutsamの概念を使うことでErlebnisという言葉で言い表したいことをはっきりさせることができる」[20]のである。また「考えることではじめて体験は具体的になる」[21]。

（五）は書名の解き明かしといってもよく、体験と創作の関係を解することが文学創作の秘密を解く鍵であることを言っている。

（六）では「構造的連関」が重要概念になる。ディルタイは「断章」のなかでこう述べている、「苦痛が、私が苦痛を感じる対象に関して、知覚あるいは観念と構造的に結びつくことは、ひとつの体験である。我々の内に現実として現れるこの構造連関が現実として含みもっているものすべてが体験である。」[22]「ディルタイは内部（Innen）と外部（Außen）の相互浸透（Ineinandergreifen）という概念を体験のダイナミックな総体とみていた。」[23]内部はSeele（心）といってもよいであろうし、あるいはSeelenleben（心的生）といってもよいであろう。構造的連関は言葉を変えれば（十）の「体験の総和」である。つまり「個々の状況から影響を受けていようとも」内部と外部の相互浸透によって体験の総和がつくられ、それが余すところなく創作において表現されるということである。

（七）では「理解」がキーワードになる。ディルタイは別の箇所で、「現実を認め、体験し、理解することが、いつでもどこでもゲーテの行動方式の基本であった」[24]と言っている。

ディルタイが考える体験と理解は不可分の関係にあるのだ。「理解（das Verstehen）という概念によってとりわけ、人間が直接ないしはみずからおこなった経験の、特に詩人の経験の限界を越え出て行くという行為を説明することが可能になる。同時に理解は体験に関しては全体との関連を意味した。というのは、理解はディルタイにとって連関から、生きた全体から生まれた理解だからである。」[25]この理解については、近年のディルタイ研究もふまえてこうも言われる、「近年のディルタイ研究者たちが、〈精神科学〉の非実証主義的な根拠づけの試みは意図的にすっかり社会的実践へと向けられていた、と指摘していることを見逃してはならない。ディルタイはじっさい、解釈学（Hermeneutik）を〈精神科学〉の一般的メソッドとして叙述しようと努めるとき、〈理解〉の生活実践的意味をつねに強調した。」[26]

（八）では「客観性」が重要な語になる。体験と客観性というのは矛盾するようであるが、ディルタイは体験を主観的とは考えていない。「体験は『内的状態』の経験であり、同時代の現実の大部分を経験したものである。体験は文学的プロセスの客観的な現実基盤である。」[27]ディルタイは『体験と創作』の別のところではこのように言っている、「詩人は人間世界のおびただしい経験を積みながら生きているのであって、それらの経験を詩人はみずからのうちに見いだすし、みずからの外で気づくのである。詩人にとってこれらの経験上

の事実は、自分の欲求の方式を満足させるために使う資料でもなければ、自分の経験を一般化するための資料でもない。詩人の目はじっと考えながら、静かに事実の上に注がれている。詩人にとってそれらの事実は重要である。詩人の感情はそれらの事実によって静かに、またときには強く刺激を受ける。自分がこれらの事実にたいしてあまり関心を抱いていなくても、それらの事実がどれほど過去のものであってもかまわない。それらの事実は詩人自身の一部になっているのだ。[28]」事実が詩人の一部になっているということが体験である。

（九）では「もっとも個人的なものが、一般的な運動から彼の本質の構成要素へと転化したものすべてと密接に結び合わせられている」ということが、体験の内実をあらわしている。これは（六）のところで述べたことと共通している。

五　結語

ディルタイは重要な概念をあまり厳密に定義せずに使う傾向があり（読む側としてはそのように思えてしまう）、体験という概念もそのひとつであるといってよいだろう。以上引用したところからおぼろげに浮かんでくるのは、ディルタイにおける体験とは、心的生（内面の生）に関わることであり、外部から内部に入ってくるという受動的なもの、あるいは外的な事象を理解するという能動的行為、つまり心的生が連関しているところから生まれるものということになる。「私が体験したもの、体験できるものはすべて〈連関〉(Zusamenhang)をつくる。」体験は外的事象つまり出来事を内面にそのまま取り入れることではない。体験を表出あるいは表現するという場合、そこには必ず連関という過程がある。さらには、「体験は心的生の獲得された連関という概念なしでは考えられなかったであろう[29]」とも言える。「心的生の獲得された連関」(der erworbene Zusammenhang des Seelenlebens) もディルタイを理解するうえで重要な概念である。これはもともとディルタイが狂人あるいは夢想家と芸術家を区別するために使った表現で、彼の講演「詩的想像力と狂気[30]」（一八八六年）のなかではじめて創出された。それからディルタイの詩学のなかで重要な術語として用いられるようになった。ディルタイによれば、心的生の獲得された連関がなければ狂人（夢想家）とされる。芸術家と狂人は似ているところがあるのだが、心的生の連関があることによって芸術家を芸術家たらしめていることになる。ローディは体験の連関を統一（Einheit）という言葉で表現し、「作品の中を一貫して流れる連関は体験のダイナミックな統一にもとづいている。作品を理解させるのは、また解釈によって明らかにされなければならないのはこの統一である[31]」と述べている。

体験が心的生のなかでおこなわれる以上、どのように体験が表現という形で具象化されていくのか、そのメカニズムを理解することは容易ではない。一方、体験はディルタイにおいては詩学の重要概念となっており、体験はあくまで文学

創作の秘密に迫るための概念である。したがって体験の一般的用法とは離れた形で体験を考えざるを得ない。外的事象が内部に入ってきて表現されるまでのプロセスを解明するために、体験とファンタジーに重要な概念を担わせたのが、ディルタイの画期的なところであった。ディルタイは晩年、一九〇七から〇八年に新たな詩学の構想をたて、そこでは第一章は「体験」(Das Erlebnis)、第二章は「詩的ファンタジー」(Die dichterische Phantasie)[32]となっていた。それより以前の一八九四年前後にたてられた詩学の構想には、体験も詩的ファンタジーもまったく姿を見せていない。[33]つまり一九〇〇年をまたいだ十数年ほどのあいだに、ディルタイの詩学構想は大転換がおこなわれたのであり、新しい詩学の中心に体験と詩的ファンタジーが置かれることになったのである。

『体験と創作』ははからずもディルタイ最大のヒット作となり、以後のドイツ文学研究に多大な影響を及ぼした。しかし、たとえばガーダマーのように「体験」に批判的で、「経験」(Erfahrung)の復権をめざした思想活動もある。一般にはErfahrungは哲学用語としても用いられる。

そういう意味では、体験(Erlebnis)に深い意味を与えたディルタイは例外的存在ともいえる。ちなみに、大江健三郎の『個人的な体験』のドイツ語訳はEine persönliche Erfahrungである。日本語の「体験」はこの場合ErlebnisではなくErfahrungなのである。

小論ではディルタイにおける体験(Erlebnis)と経験(Erfahrung)の比較を試みようとしたが、それは次回の課題としたい。

なお、小論は二〇〇七年七月に逝去された尊敬すべき同僚の故荒川道夫教授に捧げます。

(筆者・明治学院大学経済学部経営学科教授)

注

1 森有正全集第十二巻　三四ページ　筑摩書房　一九七九年
2 同九四ページ
3 同一〇七ページ
4 ルードルフ・A. マックリール『ディルタイー精神科学の哲学者』大野篤一郎他訳　一七五ページ　法政大学出版局　一九九二
5 Poetry and Experience, Edited by RudOLf A. Makkreel and Frithjof Rodi, Princeton, New Jersey 1985
6 鵜殿博喜「W・ディルタイにおける Phantasie と Einbildungskraft」「芸文研究」第八十一号　慶応義塾大学文学部　二〇〇一年
7 Frithjof Rodi : Morphologie und Hermeneutik. Zur Methode von Diltheys Ästhetik, Stuttgart 1969 S.80
8 Otto Friedrich Bollnow: Dilthey. Eine Einführung in seine Philosophie, Stuttgart 1955 S.102
9 Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften 6.Band Zweite Hälfte, Göttingen 1994 S.313
10 Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften Band 26, Göttingen 2005 S.128
11 ibid. S.128
12 ibid. S.147
13 ibid. S.151
14 ibid. S.152
15 ibid. S.154
16 ibid. S.154
17 ibid. S.154
18 ibid. S.154
19 ibid. S.156
20 a.a.O. Frithjof Rodi, S.82
21 a.a.O. Otto Friedrich Bollnow, S.102
22 Dilthey: Gesammelte Schriften Band 6, S.314
23 Frithjof Rodi: Grundzüge der Poetik Wilhelm Diltheys, in: Beiträge zur Theorie der Künste im 19. Jahrhundert. Bd.2, Hrsg.v.Helmut Koopmann und J.Adolf Schnell gen. Eisenwerth, Frankfurt a.M. 1972 S.82
24 Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften, Band 26 S.158
25 Karol Sauerland: Diltheys Erlebnisbegriff, Berlin 1972 S.143
26 W.Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung, Hrsg.v.Rainer Rosenberg, Leipzig 1988 S.390
27 Marion Förster: Wilhelm Dilthey und die Hermeneutik, Analyse der Diltheyschen Philosophie und seiner literaturwissenschaftlichen Konzeption, Dissertation zur Promotion A. Karl-Marx-Universität Leipzig.1982 S.138
28 Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften Band 26, S.120
29 a.a.O. Karol Sauerland, S.90
30 W.Dilthey: Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn, Rede, gehalten zur Freier des Stiftungstages der Militärärztlichen Bildungsanstalten. Leipzig 1886
31 a.a.O. Frithjof Rodi: Grundzüge deer Poetik Wilhelm Diltheys, S.85
32 a.a.O. Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften 6.Band, S.310
33 ibid. S.30